

## 「下からの歴史」からグローバル・ヒストリーへ

——チャールズ・ファン・オンセレンの南アフリカ犯罪史研究をめぐって——

### 堀 内 隆 行

#### はじめに

南アフリカの、しかも警察と云われて人は何を思い浮かべるだろうか。二〇世紀後半のアパルトヘイト期に精通した少数の人間なら、「アフリカ人のパス（身分証明書）を点検し、彼らの居住区に暴力的に手入れし、時には彼らに発砲」する抑圧者の姿が想起できるかもしれない。ここで注意したいのは、アジアに比べてナシヨナリズム運動や共産主義運動の拡大が遅れた南アフリカには、そうした運動を取り締まる公安警察の際立った伝統がなかった点である<sup>(1)</sup>。その一方で南アフリカには、早くも二〇世紀初頭から「各警察署が、数百キロも離れた本部に直属」する中央集権型の全国警察が存在した。これは、一八九九—一九〇二年の南アフリカ（ブール）戦争のさなかにイギリス人占領当局者の一人として、後のスコットランド・ヤード（ロンドン警視庁）警視総監エドワード・ヘンリーがやって来たことが大きかった。ヘンリーの残した全国警察はその後現地の白人たちによって引き継がれ、アパルトヘイトの

「下からの歴史」からグローバル・ヒストリーへ（堀内）

重要な暴力装置となる。

ところがこうした南アフリカの警察史は、長く法制史の一部として語られるにとどまってきた<sup>(2)</sup>。だが、ようやく二〇一四年になってキース・ブレッケンリッジが、世界的な指紋認証実用化の父としてのヘンリーを扱う中で全国警察の問題にも触れる<sup>(3)</sup>。その後はスコット・C・スペンサーが英領トランスヴァール・オレンジ川両植民地の農村警察について<sup>(4)</sup>、筆者が英領ケープ植民地の警察に関して論じた<sup>(5)</sup>。

しかし研究の内容を豊かにするためには、狭い意味での警察史にとどまらず、警察が取り締まった個別具体的な犯罪の事例なども明らかにしていくことが不可欠と言える。そこで以下では、このような問題に取り組むための手掛かりとして、三〇年以上にわたり南アフリカ犯罪史の研究をつづけたチャールズ・ファン・オンセレンの軌跡をたどりたい。ファン・オンセレンは犯罪史のみならず、南アフリカにおける「下からの歴史」の牽引者の一人であり、成果は社会経済史に関するものを中心として日本語でも紹介されている<sup>(6)</sup>。他方、その犯罪史研究が近年グロバール・ヒストリーに発展した点などはあまり知られておらず、本稿はこうした間隙を埋めることになるだろう。

## 一 アフリカ人の犯罪史

ファン・オンセレンは一九四四年に南アフリカで生まれ、イギリス・オックスフォード大学で博士号を取得した後、ヨハネスブルクのヴィットヴァターズランド大学で教職に就いた。ファン・オンセレンは通常、南アフリカ史学史においてラディカル派と位置づけられる。ラディカル派とは一九七〇年代以降、ラテンアメリカなどの従属派の経済学者、社会学者らと連動し、アパルトヘイトの原因をイギリス帝国主義と資本主義に帰したグループを指す<sup>(7)</sup>。ただし、理論的で左翼活動家でもあった一群の人々とは異なり、ファン・オンセレンは実証史家の道を歩んだ。その第一の研究領域は社会経済史で、最初の単著は、南ローデシア（現ジンバブエ）における労働強制（チバロ）について論じた『チバロ——一九〇〇—三三年の南ローデシアにおけるアフリカ人鉱山労働者——』（一九七六年）

だった(8)。また、世界最大の金鉱を擁した南アフリカのヴィットヴァータースランド地域に関する『ヴィットヴァータースランド社会経済史研究、一八八六一一九一四年』全二巻(一九八二年)を執筆したところから「下からの歴史」の立場を鮮明にしている(9)。同書は、現在にいたるまで南アフリカ社会史の必読文献となっており、一九九六年には『種は俺のもの——南アフリカの分益小作人カス・メインの生涯、一八九四—一九八五年——』も著した(10)。その一方でファン・オンセレンは、父親が刑事だったことも影響してか、犯罪史に関心を寄せた。『ヴィットヴァータースランド社会経済史研究』にも関心の一端が披露されているが、一九八四年には『一頭の馬をめぐる些細な問題——「ノンゴロザ」マセブラの生涯、一八六七—一九四八年——』を発表した(11)。同書の冒頭では、ゴフマンの『アサイラム』やフーコーの『監獄の誕生』とは異なる、下からの犯罪史を旨とせず決意が示されている。

以下、ファン・オンセレンがたどるのは南アフリカの盗賊ノンゴロザ・マセブラの生涯である。まず、南アフリカ連邦司法省の年次報告書に載せられたマセブラの自白などに拠りながら、その前半生が綴られる。マセブラは一八六七年にインド洋沿岸のズールーランドで生まれたが、幼いころに隣接する英領ナタール植民地へ移り、八三年、一六歳で植民地内の白人農場へ出稼ぎに行った。ところが八六年、農場主にはぐれ馬の責任を取らされたことに嫌気が差し、オランダ系／ブール人のトランスヴァール共和国の、当時金鉱の発見によって出現したばかりだったヨハネスブルクへ向かう。ファン・オンセレンの著書のタイトル『一頭の馬をめぐる些細な問題』とはこのことである。

ヨハネスブルクで、マセブラは犯罪の道を進む。まもなくジャン・ノートと名乗り、一八八八年には白人追い剥ぎの馬丁となった。次いで、九〇年には同郷のズールー人三人で自立して二〇〇人の配下を従えるようになり、九一ないし九二年には単独のリーダーの地位に就いた。マセブラは配下の者たちを、出身民族であるズールー人の伝統に沿う形で軍隊風に組織し、それを「丘の連隊」と称した。丘の連隊は、ファン・オンセレンによれば「抵抗の精神と社会的公平の感覚」に満ちていた。その一方でマセブラは、メンバーの性病が問題化すると異性ととの交渉を禁じたことなどで知られるようになり、新聞記事では義賊と持てはやされた。

マセブラが初めて逮捕されたのは一八九九年のことである。まもなく懲役五年と鞭打ち二五回を言い渡されたが、

一〇月に南アフリカ戦争が始まると他の囚人たちとともに釈放される。しかし、一九〇〇年にイギリス軍がヨハネスブルクを占領すると再び逮捕され、今度は懲役七年、鞭打ち三〇回の刑に処された。ところが、監獄は賄賂が横行するなど規律が乱れており、懲役の一環である鉱山労働の現場では囚人と外部との連絡も容易だった。マセブラも、監獄、鉱山の飯場、黒人居住区などにまたがる組織への影響力を維持する一方で、〇二年、〇四年、〇八年には脱獄にも成功した。もちろん、脱獄する度に捕まって懲役刑の年数は追加されたが、監獄の中では、囚人として潜り込んでいた当局のスパイを拷問するなど気ままにふるまった（この拷問については「スパイの歯を折って作ったネックレスを付けた」という伝説が残されている）。他方監獄の外で、マセブラの組織は白人農場の家畜泥棒などにも手を広げ、一〇年と一二年には白人警官の殺害事件まで引き起こした。

だが、一連の警官殺害事件は当局の姿勢を硬化させた。また当時は、南アフリカ戦争のさなかにエドワード・ヘンリーが種を蒔いた司法改革が、一九一〇年の南アフリカ連邦結成を経てようやく結実しようとする時期に当たっていた。監獄の規律も強化されつつあり、こうした背景のもとで当局は、ズールー語を流暢に操るリベラルな白人看守を使ってマセブラの懐柔を試みる。この試みは功を奏し、一九一二年、四五歳のマセブラは完落ちして過去を告白した。ここで、その告白を主な史料としてきたファン・オンセレンの著書の前半部が終わり、新聞・雑誌の記事や、マセブラを知る人々へのインタビューなどにもとづく後半生の物語が始まる。

完落ちしたマセブラは、まず監獄の看守として採用された。所長への敬礼を拒否する騒ぎも一度起こしたがこれは例外的で、特に一九一四年からは、かつて支配していた組織を当局が弱体化させるのに積極的に協力した。この協力が一六年に一段落するとマセブラは、幼いころから一九歳までを過ごしたナタール州<sup>(註)</sup>の監獄へ配置換ええられる。さらに、その後まもなく当局によって、南アフリカ連邦の北東に隣接する英領スワジランド植民地（現エスワティニ）に農地を買い与えられて移り住むこととなった。要は、体よく厄介払いされたのである。

しかし、このころからマセブラの人生は暗転する。スワジランドでの小農経営はやがて上手く行かなくなり、一九二四年、マセブラはトランスヴァールへ舞い戻って精神病院の雑役係になった。だが同僚たちの多くは、民族と言語

を異にするソト人だったため打ち解けなかった。また、マセブラは酒場通いの金に事欠き、酒場に用心棒代と称して酒代の値引きを強要する。他方、病院の庭で採れた野菜の横流しも始めたが、二八年、手荷物検査を行おうとした白人職員を脅迫して解雇され、鉾山の売店の警備員に転じる。ところが三〇年、売店の前で騒いでいた若者の一団を注意した際、中の一人の女性を自室に連れ込んでレイプし逮捕、無期懲役の判決を言い渡された。もつとも四〇年には釈放されるが、元配下の歓迎を避けた寂しいもので、首都のプレトリア総合病院で警備員の仕事を得たものの、窃盗の嫌疑を掛けられるなど居心地は悪く、その後も職場を転々とする。そして、四五年に清涼飲料の瓶詰会社の警備員を退職した後は黒人居住区の収容施設で困窮生活を送り、四八年、結核が悪化したため元の職場のプレトリア総合病院に移されて八一年の生涯を閉じた。終わりにファン・オンセレンは、マセブラにまつわる「銃弾が貫通しなかった」「監獄の扉を自由に通り抜けた」などの伝説を紹介する。さらに、犯罪者にもかかわらず英雄視されていたこと、伝説の中身がガーナの政治指導者のンクルマらにも共通するものだったことを指摘して筆を擱く。

## 二 グローバル犯罪史への転換

前章では、「二頭の馬をめぐる些細な問題」の内容を見てきた。たしかに同書は、丘の連隊の「抵抗の精神と社会的公平の感覚」を強調するなど、マセブラの生涯を美化し過ぎていた。それでも、一時は華々しく活躍したにもかかわらず、当局への協力者に転じたことを契機に人生を暗転させていく物語には胸を打つものがある。一人の人物に光を当てるファン・オンセレンの手法は、(犯罪史ではないが)一九九六年の『種は俺のもの』(前述)でも如何なく発揮された。

ただしその後、ファン・オンセレンはアフリカ人の主題から遠ざかる。このことは、南アフリカの白人歴史家全体の問題として理解するのが適切だろう。一九八〇年代は、南アフリカの白人リベラルが黒人たちと反アパルトヘイトの政治目標を共有した時代で、歴史家の研究関心も一様にアフリカ人へと向けられていた。だが、アパルトヘイトが

終わつた後に多文化主義の社会が実現するという期待は、九四年にマンデラが大統領に就任してまもなく裏切られる。白人政党は政権から排除され、地名や祝日などの「アフリカ化」が進んだ<sup>(13)</sup>。こうした動きに疎外感を覚えた白人歴史家は、研究対象を自分たち白人、あるいは(南アフリカ史にとどまらない)グローバル・ヒストリーへと移していく<sup>(14)</sup>。ファン・オンセレンをめぐっては、妻で社会学者のペリンダ・ボツゾーリが、白人リベラルの野党である民主同盟の国会議員となつた点も指摘しておくべきだろう。

他方でファン・オンセレン自身は、一九九九年にプレトリア大学へ異動し、二〇〇七年には、グローバル犯罪史に関する初の(そして最も重要な)著書となる『狐と蠅たち——ある奇怪な犯罪の達人の隠された生涯——』を世に出した<sup>(15)</sup>。同書の主題はポーランド出身のユダヤ人で、一九一〇世紀転換期の環大西洋世界をまたに掛け売春宿の経営者、(売春婦をあっせんする)女衞、強盗、警察のスパイなどとして暗躍したジョゼフ・リス(ジョゼフ・シルバー)の生涯である。ファン・オンセレンは冒頭、一九四五年に南アフリカのとある精神病院でユダヤ人の女性患者が、四四年の長きにわたる入院生活の末に亡くなったシーンを描く。この女性レイチエル・ラスキンは、同郷のリスによって当地の売春宿に連れて来られ、客をとるうちに性病をうつされて痴呆状態に陥つた。それでは、ラスキンの人生を狂わせたリスとはどのような人物だったのか。ここで舞台は、リスが生まれ育つた一九世紀後半のポーランドに移る。

リスは一八六八年、ワルシャワとクラクフの中間に位置するキェルツェの町に生まれた。一八世紀末のポーランド分割とその後の領土の変遷を経て、ワルシャワとキェルツェはロシア領、クラクフはハプスブルク帝国領になっていた。リスの祖父アツバは、貴族身分のシユラフタの子弟からギャンブルの借金のカタとして衣服などを巻き上げ転売していた。このような話が今日まで伝わるのは、ポーランドに残つた(リスとは別系統の)子孫がナチによるユダヤ人大量虐殺(ホロコースト)の犠牲になり、後に記憶の復元作業の対象とされたためである。リスの父アンセルも商人の商売が上手く行かず、仲間とともに毛皮のコートを盗むなどしていた。またアンセルはタバコ商のハンナと結婚したものの、二人とも異性関係は派手で、特にハンナは一八七三年に別の男性との息子ジェイコブ(後にジャックと

改名)まで産んだ。ファン・オンセレンは、こうした母親のためにリスが女性嫌い、バイセクシャルになったと推測している。リス自身は長じて理容師の仕事に就いたが、八〇年代前半のユダヤ人迫害(ポグロム)に加え、父親への借金の取り立てが自分に及んだこともあって八五年にイギリスへ移民した。

イギリスでリスは、ロンドン・イーストエンドのスラムに住んだ。ここでのリスはなお理容師だったようで、一八七七年にはローズという女性との間に娘バーサが生まれた。翌八八年、イーストエンドでは、娼婦たちが連続殺人の犠牲になる切り裂きジャックの事件が起こり世間を震撼させた。この未解決事件とリスの関係については、巻末で再論される。だが事件の興奮冷めやらぬ八九年、リスは同郷で俳優のアドルフ・ゴールドバーグとともに(ローズとバーサを残して)ニューヨークへ移った。

ニューヨークで、二人はまず夜盗になる。先に移民し、盗品の売買をしていたゴールドバーグの兄弟のつてだった。しかしまもなく捕まり、禁錮二年六か月の実刑判決を言い渡される。当時の監獄の入獄者登録簿によれば、リスは身長五フィート八・五インチ(約一七四センチ)体重一四〇ポンド(六三・五キロ)、目は灰色、髪は茶色で肌の血色は悪く、自身について(ユダヤ教徒ではなく)プロテスタントと述べていた。一八九一年に出獄すると、リスはイギリスへ戻るためにパスポートを申請する。このとき初めてジョゼフ・シルバーの変名を用いたので、本稿も以後はこれに倣おう。だが申請は、ゴールドバーグが別の夜盗事件を起こしたことが影響して頓挫した。

ニューヨークにとどまることを余儀なくされたリス改めシルバーは、売春婦たちに用心棒代を強要するとともに、特に宝石店での夜盗に従事した。こうした稼業の中でシルバーは、ニューヨーク警察のチャールズ・ジェイコブズ刑事と出会う。ジェイコブズはユダヤ系の移民二世で、同胞のアナーキストであるエマ・ゴールドマン<sup>(16)</sup>を担当したことで知られる。その一方でジェイコブズは、さまざまなブラックビジネスを見逃す代わりに稼ぎの二割を懐に収めた。シルバーはジェイコブズに金を納めるだけでなく、スパイとしても協力した。もともと、このころシルバーがゴールドバーグに送った手紙には、ジェイコブズへの嫌悪感のはっきりと示されている。

ところが当時ニューヨークでは、プレスビテリアン(長老派)の牧師で共和党系のチャールズ・パンクハーストラ

が市政改革に着手し、警察についても警官と犯罪者の癒着など腐敗の撲滅に乗り出した。これを目の当たりにしたシルバーはニューヨークでの稼業に見切りを付け、一八九三年に鉄鋼業の町ピッツバーグへ向かう。ピッツバーグでシルバーは初めて売春宿を経営するが、いくつかの犯罪に関与して現地警察の追及を受けたためニューヨークへ逃亡した。しかしそこで、圧力に抗し切れなかったジェイコブズによつて逮捕され、禁錮一四か月の刑に処された。この刑期のあいだに、シルバーにとつて生涯の病となる梅毒の最初の症状が現れたようだ。九四年の大晦日にシルバーは釈放されたが、ここで彼は、自分を裏切つたジェイコブズへの復讐心もあつてパンクハースト側のスパイに転じた。だがこれは時期尚早で、ジェイコブズに追い詰められたシルバーはニューヨークでの居場所を失つて九五年中にロンドンへと戻つた。後のアメリカ合衆国大統領セオドア・ローズヴェルトがニューヨーク市公安委員会の委員長に就任し、パンクハーストらの警察改革を引き継いで名を馳せるのはその直後のことである。

ロンドンへ戻つた時点で、シルバーは一文無しだった。しかし、夜盗などをしながら元手を稼ぎ、やがて女衞のビジネスを始める。シルバーは良い身なりをして、イギリスに着いたばかりの東欧系ユダヤ人移民の若い女性たちに近づき、彼女たちを売春婦として売り飛ばした。シルバーのビジネスの特徴は、売り飛ばし先を海外に求めた点にある。それは最初、人的ネットワークを持つアメリカ合衆国だったが、しがらみも競争相手も多かつたため、まもなく南アフリカに変わる。特に、金鉱の拡大がつづいていたトランスヴァール共和国のヨハネスブルクは白人独身男性に比べて女性が圧倒的に少なく、将来有望な市場だった。またシルバーは、もと俳優のゴールドバーグを介してヨハネスブルクの劇場関係者ともつながりを有していた。イギリスでも南アフリカでも当時、場末の「俳優は半分ぼん引き、女優は半分売春婦」だった。このような稼業の一方でシルバーは一八九五年、ユダヤ系ではないポーランド人のある女性と結婚する。だが、窃盗で逮捕され懲役三か月の刑に服しているあいだに、女性は行方不明となつた。他方で、異父弟のジャックがロンドンへやつて来てビジネスに合流する。

ただ、シルバーの女衞業はその後いくつかの壁に突き当たつた。まず、英国ユダヤ人のエリート層が同僚の国際的な人身売買を問題視するようになり、一八九六年にはユダヤ人女性保護協会が活動を始めていた。また、アメリカ合



衆国とは違ってイギリスでは警官と犯罪者の癒着が少なく、ブラックビジネスが見逃される余地はほとんどなかった。シルバーは最良の法廷弁護士たちを雇ったものの、そうした策には限界があった。さらに、ある女性を売春婦にすべく葉漬けにしたことが発覚する。これが決定打となって九八年末、シルバーはヨハネスブルクへ逃れた（このときジャックとはいったん別れた）。

しかし、一八九五年にロンドンへ戻ったときと違い、シルバーはある程度の財産を移すことができた。そこで女衛業に見切りを付け、ピッツバークで経験した売春宿の経営を再開する。シルバーは自身の売春宿に「アメリカンクラブ」と名を付け、ニューヨークスタイルの洗練された商売を展開してわずか半年のうちに大成功を収めた。もともと、この大成功はシルバーの商売上手のためだけではなかった。トランスヴァール共和国では警官の給料が低く、彼らとの癒着も容易であるという環境の利点も存在した。加えてシルバーは、鉱山所有者や銀行との関係まで築きつつあった。

だが、アメリカンクラブの急速な拡大は業界内に多くの敵を作り出した。また当時のトランスヴァールでは、イギリス・ケンブリッジ大学帰りの少壮の弁護士ヤン・スマッツが司法相に任命され、エドワード・ヘンリーに先立つ一連の改革に着手していた<sup>17</sup>。売春をめぐるてもスマッツは、これを必要悪と見なし放置する検察官から実権を奪って若手に移す。この若手検察官が、警官S・G・マリッツ<sup>18</sup>による告発を手掛かりとしてアメリカンクラブ掃討作戦を指揮し、シルバーは逮捕された。シルバーは高名な弁護士を雇う一方で、不利な証言をしようとする売春婦たちを脅迫したが、結局二年の懲役を言い渡される。しかし、監獄の中でも受刑者の黒人男性をレイプするなどして悪名を轟かせた。さらに、一八九九年一〇月に南アフリカ戦争が始まると（マセブラらと同様に）釈放され、戦火を逃れてケープタウンへと移った。

シルバーはケープタウンで、賭博場を開いて資本を作り、売春宿の経営を再開することを目ざした。だが、ここではすでに、ロシア系ユダヤ人のマックス・ハリスが警官と癒着しつつ、賭博と売春にまたがる強固な組織を築いていた。シルバーは止む無く当座、別の警官サミュエル・ロリマーのスパイとして収入を得ることにし、ケープ植民地北

部の鉱業の町キンバリーでダイヤモンド盗の摘発に従事する。しかし、一九〇二年五月に戦争が終結すると、英領オレンジ川植民地（もとブルー人のオレンジ自由国）の主都ブルームフォンテインでブラックビジネスを始めるべくスパイの業務から手を引いた。

ブルームフォンテインは植民地の主都と言っても、田舎町でビジネスの競争相手は少なく、シルバーは商売の独占を狙った。まず、例によって元手稼ぎのため宝石店で夜盗を働いたが、地元警察の無気力ゆえに嫌疑を掛けられただけで終わった。次に、分け前をめぐって売春婦を脅迫したことが地元紙で報じられ、このときは逮捕された。だが、ヨハネスブルクやニューヨークでの過去まで暴かれたものの、偽証を貫いて有罪とはならなかった。しかし、トランスヴァール都市警察のスパイで組織売春の監視業務に従事していたジェームズ・ヒルシエンバーグ<sup>19</sup>の殺人未遂では、収監を免れなかった。もともと獄中で梅毒が悪化して一九〇三年四月には仮釈放されたが、翌五月に入るとケープ植民地へ強制送還される。

その前年の一九〇二年、ケープ植民地では、売春取り締まりのための道德法が制定されていた。同法の制定は、短期的にはシルバーにとって有利に働いた。目の上の瘤だったハリスならびに彼と癒着していた警官が一扫された一方で、その間隙を縫ってシルバーの上役のロリマーが権力を拡大したためである。まずハリスの賭博場がガサ入れを受け、彼には一五〇ポンドの罰金刑が課された。次いで、ハリスは本丸の道德法違反でも裁判に掛けられて懲役二年、鞭打ち一五回の刑に処され、彼と癒着した警官も一年三か月の懲役刑となった。他方、ケープタウンで売春宿の経営を再び目ざしたシルバーは、ロリマーの庇護の下きわめて順調に商売を展開する。

ところが、一九〇四年にケープ都市警察が創設されてR・M・クロフォードが警視總監の地位に就くと様相は一変した<sup>20</sup>。売春の取り締まりにも熱心なクロフォードは、ロリマーにシルバーの切り捨てを命じた。シルバーは道德法違反の容疑で検察に召喚され、さらに他の罪も問われて三か月の懲役刑を課された。翌〇五年二月には釈放されたものの、もはやケープ植民地に居場所はなく、六月になるとドイツ領南西アフリカ（現ナミビア）の港町スワコプムントへ移る。

シルバーがスワコプムントを次の拠点に選んだのは、当時のドイツ領南西アフリカには、先住民ヘレロの武装蜂起を鎮圧するため多数の兵士が集結していたからだ。シルバーは彼らの需要を満たすべく売春宿の経営を始めたが、そこには特有の困難さも存在した。英領植民地とは異なり、ドイツ領では売春宿や客引きが違法である一方、売春そのものは合法だった。このことは売春婦の地位が高く、売春宿の経営者としては彼女たちに強く出られない事態につながった。不慣れた状況の中で、シルバーは売春婦たちとのトラブルを引き起こして一九〇五年の内に逮捕され、懲役三年と罰金一〇〇〇マルク（支払えなければ懲役三か月追加）を言い渡された。さらに、〇八年三月にはドイツ・シユレスヴィヒ<sup>1</sup>ホルシユタイン州ノイミュンスター<sup>2</sup>の監獄へ護送される。

一九〇八年八月、四〇歳のシルバーは刑期の満了に先立ち、一九〇五年の末から数えて二年八か月で釈放された。だが、罰金一〇〇〇マルクに加えてドイツへの護送代まで支払ったことで無一文となっていたばかりか、梅毒も進行していた。釈放後シルバーは、フランス・パリで異父弟ジャックと、二一歳になった娘バーサに迎えられた。フランスは、一八九四年のドレフュス事件で知られているように反ユダヤ主義の盛んな国だった。しかし、一九〇六年にイギリスで移民規制が強化されると、パリはユダヤ人にとって、ロンドンと並ぶ新世界へのバイパスになった。特にパリは「南米のパリ」アルゼンチン・ブエノスアイレスとの結び付きが強く、ジャックはパリを拠点に、ヨーロッパと南米をまたに掛けた国際的宝石盗として暗躍していた。

シルバーはこのジャックのついで、バーサとともに（ジャックとは別の）宝石盗の一味となった。そして一九〇九年四月にパリで最初の犯行を働いたが、まもなく逮捕される。このとき警察によって、現在まで残る数少ない写真の一つ（マグシヨット）を撮影された。だが、一月に懲役三年と被害者への賠償金二〇〇〇フランを課されたものの、ベルギーのアントワープへ逃亡した。

ベルギーでもシルバーは、アントワープを拠点に盗賊団の一味として犯行を重ねた。一九一〇年一月にはリエージュで株式仲買人の金庫の中身を盗んだが、この事件の予審判事ボンジャンは、後にリエージュ出身の推理小説家ジュールジュ・シムノンによってメグレ警視のモデルとなっている。シルバーは、一〇年三月にもブリュッセルの宝石

店で犯行を働いた。この間、盜賊団の仲間たちは次々と逮捕されたが、シルバー自身は五月にドイツ・アーヘンの火災保険会社で犯行を働くと、一〇〇〇〇ドルを持ってブエノスアイレスへ高飛びする。

ブエノスアイレスに到着してまもなく、シルバーはチリの首都サンティアゴを経てその外港バルパライソへと移った。チリが潜伏先選ばれた理由としては、アーヘンで犯行が行われたのと同じ一九一〇年五月に、ブエノスアイレスとサンティアゴ／バルパライソが鉄道で結ばれたことが大きかったようだ。シルバーは、バルパライソで老舗の売春宿を買収して経営する。やがてジャックもここに入入りするようになったが、バーサはブエノスアイレスにとどまり、チリまで来ることはなかった。また、追手もチリまでは及ばなかった。しかし、一三年三月にバルパライソで犯罪捜査課の書記官が、売春に係る人身売買を告発したパンフレット『チリにおける白人奴隷交易』を公にすると、警察による関係者の摘発が始まった。シルバーはチリ国内で身を隠したものの、世論と警察の追及が収まらなかつたため、同年後半にはブエノスアイレスを経由して北半球へ戻った。

その後一九一六年末まで、シルバーの足取りは限定的にしつか攔めない。拠点はロンドンに置いていたようだが、一四年五月から第一次世界大戦開戦前後の同年夏にはニューヨーク、一六年の一時期にはブラジルのリオデジャネイロへ赴いた。この間、バーサは一三年八月と一五年三月にロンドンで叔父ジャックの子を産んだ。他方、シルバーは一七年初頭にオランダ経由でドイツへ渡る。そこで、ポーランド／東部戦線のドイツ軍とハプスブルク帝国軍において売春宿の需要が高まっていることを知り、最前線の町ヤロスワフへ向かった。だが、ヤロスワフでシルバーは売春宿の経営でなく、ハプスブルク帝国軍の横流し物資を、敵対するロシア軍に売る仕事に手を染める。このことが発覚し一七年末、ハプスブルク帝国軍当局によって逮捕された。一八年三月、ロシア革命後のソヴィエト政権とドイツ、ハプスブルク帝国はブレスト・リトフスク条約を結び、東部戦線での戦闘は終息した。しかし、その後にシルバーは裁判に掛けられ、一八年一〇月一日処刑された。ドイツとハプスブルク帝国が降伏して大戦が終結するのは、そのわずか一か月後のことである。ただし、ファン・オンセレンの著書はこれで終わらず、物語は一八八八年のロンドン・イーストエンドに戻る。そして、切り裂きジャックの容疑者としてヴィクトリア女王の嫡孫アルバート・ヴィクター

王子や『不思議の国のアリス』の作家ルイス・キャロルなどの名前が挙がる中、シルバーが切り裂きジャックである蓋然性も高いことが指摘される。

『狐と蠅たち』の後もファン・オンセレンは、犯罪史に関する著書を二冊出した。その一冊目は、二〇一〇年の『覆面強盗たち——南部アフリカにおけるアイルランド系盗賊団、一八八〇—一八九九年——』である<sup>(21)</sup>。同書は、主題となる覆面強盗たちについて、ルーツとしてのアイルランド農村からマンチェスターなどの工業都市を経て南アフリカへいたる移動の道筋を明らかにしており、そうした意味ではグローバル・ヒストリーと言える。だが、『狐と蠅たち』の本文五〇九頁の中でヨーロッパ・南北アメリカ関連が三三九頁を占めるのに対して『覆面強盗たち』のアイルランド・イギリス関連は一割に満たず、全体的には南部アフリカ史の色彩が強い。覆面強盗たちの多くは英軍兵士として南アフリカへやって来たものの、やがて脱走しトランスヴァールでいくつかの「アイルランド人部隊」を形成する。彼らは銀行強盗、追剥ぎ、金庫破りなどに従事したが、さまざまな理由から「犯罪のヒーロー」「アウトローのレジェンド」「社会的盗賊」などと持てはやされた。このように白人義賊を扱う点で、本書は黒人義賊のマセブラが主題の『一頭の馬をめぐる些細な問題』と対を成している。

本書はまた、彼ら盗賊団の歴史を同時代の二つの政治的出来事と比較する。一つは、一八九五—九六年のジェイムソン侵入事件である。これは、ケープ植民地首相のセシル・ローズが配下のリアンダー・スター・ジェイムソンに部隊を指揮させ、トランスヴァール共和国の転覆を企てるも失敗に終わった事件だった。この事件についてファン・オンセレンは「盗賊的」クエダ未遂と呼び、「アイルランド人部隊」との共通項を見出そうとしている。もう一つの比較対象は、アイルランド・ナシヨナリスト／フィーニアンの動向である。フィーニアンの一部はジェイムソン侵入事件の後にトランスヴァールへやって来て、反英意識を共有するブルー人に協力した。このフィーニアンについてもファン・オンセレンは、民族的抵抗の面でアイルランド系盗賊団との連続性を強調している。以上のように本書は盗賊団の歴史の相対化を試みたが、特にジェイムソン侵入事件への関心は後の著書でも示される。

『覆面強盗たち』につづくファン・オンセレンの単著は、二〇一五年の『レッド・ライオンでの決着——ジャック

ク・マクロクリンの生涯と時代、一八五九—一九一〇年——である<sup>22</sup>。同書の主人公マクロクリンはアイルランド系盗賊団の一人で、マンチェスターに生まれて初め軍艦の乗組員となった。ところがシンガポール寄港中に脱走し、四年間のオーストラリア滞在中を経て一八八六年、金鉱が発見された年にトランスヴァールへ向かった。マクロクリンはトランスヴァールとポルトガル領東アフリカ（現モザンビーク）をまたに掛け盗賊として活躍したが、この間逮捕され脱獄を試みたときに右腕を失い、以後「隻腕のジャック」と呼ばれた。さらに、九五年には盗賊団内部の裏切り者をビアホルの「レッド・ライオン」で殺したため<sup>23</sup>、その後一四年間にわたってインド、オーストラリア、ニュージラランドで逃亡生活を送った。しかし、一九〇九年に南アフリカに舞い戻ったところで逮捕、処刑される。以上の『レッド・ライオンでの決着』の内容は『覆面強盗たち』と重複する箇所が多いものの、アジア、オセアニアなど『狐と蠅たち』でも扱われなかった地域までカバーしており、『覆面強盗たち』よりはグローバルな犯罪史と言えるかもしれない。

## おわりに

ここまでファン・オンセレンの研究の軌跡をたどってきたが、第一に驚かされるのは『チバロ』から『レッド・ライオンでの決着』まで、実証的単著が七点に上ることである。さらに驚くべきことに、ファン・オンセレンはその後も三点の単著を物している。ただし、犯罪史からは離れたようだ。まず、二〇一七年には『カウボーイ資本家——ジョン・ヘイズ・ハモンド、アメリカ西部、南アフリカのジェイムソン侵入事件——』が刊行された<sup>24</sup>。同書は先述のジェイムソン侵入事件について、ローズとジェイムソンではなく、二人の親友で鉱山経営者のハモンドが果たした役割を重視する。ハモンドはアメリカ合衆国出身で、南部からカリフォルニアへ移住した家庭に生まれた。彼は、南北戦争時にサンフランシスコで南部出身者が親南部の「太平洋共和国」を建てようとした経験をよく知っており、また労働組合員や盗賊との戦闘経験から暴力も辞さなかった。こうして培われた「カウボーイ」的心性がハモンドに

ジエイムソン侵入事件のプロットを描かせた、とファン・オンセレンは述べている。本書の重要な特徴は、事件をイギリスの帝国主義侵略の一環というより、アメリカ合衆国の膨張の延長線上に見ている点だろう。トランスヴァール共和国の転覆に際し、テキサスやハワイの併合時（あるいは太平洋共和国の失敗時）と似た手法が採られたことはすでに気づかれてきたが<sup>(25)</sup>、ファン・オンセレンはこれを実証的に跡づけた。本書はたしかに、合衆国と南アフリカをつなぐトランスナショナル・ヒストリーである。しかし繰り返しになるが、盗賊的クーデタ未遂を扱っているものの犯罪史とは言えない。

ファン・オンセレンの残る二点の単著は、いずれも南アフリカとポルトガル領東アフリカ／モザンビークの関係史をめぐるものである。二〇一九年の著書では、二〇世紀前半にトランスヴァール／ヴィットヴァータースランドの金鉱へモザンビーク人出稼ぎ労働者を運んだ夜行列車が主題となっている<sup>(26)</sup>。また、二〇二三年の著書は全三巻で、両地域の社会経済的關係が包括的に扱われた<sup>(27)</sup>。特に、後者（二〇二三年の著書）では第二巻と第三巻で、二〇世紀前半を中心に南アフリカの白人男性がポルトガル領東アフリカを買春・カジノリゾートとして利用したことに触れられている。その意味で、同書の内容は犯罪史とまったく無関係というわけではない。だが二〇一九年、二三年の著書ともむしろ、一九八二年の『ヴィットヴァータースランド社会経済史研究』の射程を時間的にも空間的にも拡大したものと捉えたほうが適切だろう。

筆者は本稿の冒頭で、「警察史」研究の内容を豊かにするためには……警察が取り締まった個別具体的な犯罪の事例なども明らかにしていくことが不可欠」と記した。そこで最後に、これまで見てきた内容をどのように警察史へ還元するのかについて考えてみたい。実を言えば、ファン・オンセレン自身がすでにこうした問題に取り組んでいる。例えば二〇〇三年の論文では、南アフリカ戦争前夜のトランスヴァールにおけるシルバーと司法当局の対決を当局の側から検討した<sup>(28)</sup>。また二〇〇七年の論文では、シルバーとヒルシエンバーグ（註19参照）の二人を警察への情報提供者（スパイ）という観点に立つてまとめ考察している<sup>(29)</sup>。しかしいずれの論文からも感じるのは、個別の事例を一般化することの困難である。

その一方でファン・オンセレンの犯罪史研究は、たしかに警察史の問題を考える上で重要な素材を与えている。マセブラを追い込んだのは詰まるところエドワード・ヘンリーの司法改革で、シルバーが各地を転々とすることを余儀なくされたのも、ニューヨークやトランスヴァール共和国、ケープ植民地などにおける警察改革のためだった。この事實は、一九一〇世紀転換期に世界を席卷した革新主義運動が一定の成果を収めたことを示唆していないだろうか<sup>30</sup>。他方で革新主義の時代、警察にもたらされたものの一つは、指紋などを用いた科学捜査だった。だがシルバーの物語でたびたび問題になるのは、警察がそうしたツールを利用しても技術的に未熟で、犯人の足取りをなかなか追えなかったことである<sup>31</sup>。このように、『狐と蠅たち』は当時の科学捜査の限界についても教えている。司法改革の成果も含め、狭義の警察史にとどまっただけで見えてこなかった世界が、犯罪史を通して明らかになる点は確実と言えるだろう。両者の架橋が必要なゆえんである。

## 註

- (1) アジアの英領植民地における公安警察については、鬼丸武士『上海「ヌーラン事件」の闇―戦間期アジアにおける地下活動のネットワークとイギリス政治情報警察―』（書籍工房早山、二〇一四年）。
- (2) 例えば、M.E. Brogden, "The Origins of the South African Police: Institutional versus Structural Approaches," *Acta Juridica* (1989) ; Martin Chanock, *The Making of South African Legal Culture 1902-1936: Fear, Favour and Prejudice* (Cambridge, 2001), 45-60. 以下参照。John D. Brewer, *Black and Blue: Policing in South Africa* (Oxford, 1994) .
- (3) Keith Breckenridge, *Biometric State: The Global Politics of Identification and Surveillance in South Africa, 1850 to the Present* (Cambridge, 2014). (拙訳『生体認証国家―グローバルな監視政治と南アフリカの近現代―』岩波書店、二〇一七年) 七〇―二頁。
- (4) Scott C. Spencer, *Realizing Greater Britain: The South African Constabulary and the Imperial Imposition of the Modern State, 1900-1914* (Oxford, 2020). 英領トランスヴァール・オранже川西植民地の農村警察については以下参照。Albert Grundlingh, "Protectors and Friends of the People? The South African Constabulary in the Transvaal and the Orange River Colony, 1900-1908," in



- David M. Anderson and David Kilvingray (eds.), *Politics the Empire: Government, Authority and Control, 1830-1940* (Manchester, 1991).
- (5) Takayuki Horichi, "19th and Early 20th Century Policing in the Cape Colony," *Studies and Essays in History and Archaeology, Faculty of Letters, Kanazawa University* 12 (2020).
- (6) 峯陽一「解説『新版 南アフリカの歴史』を読む——リベラル・ラディカル論争をめぐって——」レナード・トンブソン(宮本正興ほか訳)『南アフリカの歴史【最新版】』(明石書店、二〇〇九年)、五二〇頁。
- (7) 拙稿「イギリス帝国における南アフリカーその歴史をどう理解するか」吉澤誠一郎監修『論点・東洋史学—アジア・アフリカへの問い—五八一』(ミネルヴァ書房、二〇二二年)。
- (8) Charles van Onselen, *Chibaro: African Mine Labour in Southern Rhodesia, 1900-1933* (London, 1976).
- (9) Id., *Studies in the Social and Economic History of the Witwatersrand 1886-1914*, 2 vols. (Johannesburg, 1982).
- (10) Id., *The Seed Is Mine: The Life of Kas Maine, a South African Sharecropper, 1894-1985* (New York, 1986).
- (11) Id., *The Small Matter of a Horse: The Life of 'Nongolaza' Mathebula, 1867-1948* (Johannesburg, 1984).
- (12) かつての英領ナタール植民地は、南アフリカ連邦が結成
- 「下からの歴史」からグローバル・ヒストリーへ(堀内)
- されるとその一部になり、ナタール州とされた。
- (13) 拙著『ネルソン・マンデラー分断を超える現実主義者——(岩波新書、二〇二二年)、一四〇—一頁。
- (14) 同『異郷のイギリス—南アフリカのブリティッシュ・アイデンティティ—』(丸善出版、二〇一八年)、五一—六頁。
- (15) Charles van Onselen, *The Fox and Fies: The Secret Life of a Grotesque Master Criminal* (New York, 2007).
- (16) エマ・ゴールドマンについては、田中ひかる「女性の解放とアナキズム—エマ・ゴールドマン、伊藤野枝、そしてロジャヴァ革命に焦点を当てて—」『大原社会問題研究所雑誌』七五九号(二〇二二年)、二五—八頁など。
- (17) スマッツは二〇世紀前半、二度にわたって南アフリカ連邦の首相を務めた一方で、イギリス帝国のCOMMONWEALTH(英連邦)への移行や国際連盟・国際連合の創設に際しても重要な役割を果たした。
- (18) マリッツは二〇世紀前半、オランダ系／ブール人のアフリカーナー・ナシヨナリスト活動家に転じる。まず一九一四年に第一次世界大戦が勃発し、南アフリカ連邦がイギリス側に立って参戦すると、これに反対する武装蜂起の首謀者の一人となった。反英意識に加え、同じ「ゲルマン民族」であるドイツ人への親近感からだった。また三〇年代には、ナチズムと反ユタヤ主義に強く傾斜した。このマリッツの反ユタヤ主義についてファン・オンセレンは、一九九〇年代末にシルバーの存在を知ったことがルートツだっ

- たと指摘する（もちろんこれは、ユダヤ人犯罪者がいたから反ユダヤ主義も当然であると主張する意図ではない）。
- (19) ヒルシエンバーグの軌跡は、グローバルな人の移動という観点で興味深い。一八九〇年代に旅順次いでウラジオストクで日本のスパイを務めた後、一九〇〇—〇一年の義和團戦争の際には北京で英軍に参加、このことが機縁となり英軍占領下のトランスヴァールへとやって来た。
- (20) ケープ都市警察の創設とR・M・クロフォードについては以下の拙稿を参照。Horichi, "19th and Early 20th Century Policing in the Cape Colony," 30.
- (21) Charles van Onselen, *Masked Raiders: Irish Banditry in Southern Africa, 1880–1899* (Pretoria, 2010).
- (22) Id., *Showdown at the Red Lion: The Life and Times of Jack McLoughlin, 1859–1910* (Johannesburg, 2015).
- (23) 本書のタイトル『ランド・ライオンズの決着』の由来である。
- (24) Charles van Onselen, *The Cowboy Capitalist: John Hay Hammond, the American West and the Jameson Raid* (Johannesburg, 2017).
- (25) 一九世紀に個人的ないし合衆国の利益、栄光などのため他国で反乱や侵入事件を起こした人々はフィリバスターと呼ばれるが、これは、議事妨害者という現代の意味とは異なる。
- (26) Charles van Onselen, *The Night Trains: Moving Mozambican Miners to and from the Witwatersrand Mines, 1902–1955* (Johannesburg, 2019).
- (27) Id., *Three Wise Monkeys vol. 1: The Makings of an African Economic Tygeedy: Mozambique, circa 1500–1960* (Johannesburg, 2023); *Three Wise Monkeys vol. 2: Through the Turnstiles of the Mind: White South Africans and the Freedoms of Mozambique, circa 1914–1975* (Johannesburg, 2023); *Three Wise Monkeys vol. 3: The Quest for Wealth without Work: The Lourenço Marques Lottery, Protestant Panics and the South African White Working Classes, circa 1890–1965* (Johannesburg, 2023).
- (28) Id., "The Modernization of the Zuid Afrikanische Republiek: F.E.T. Krause, J. C. Smuts, and the Struggle for the Johannesburg Public Prosecutor's Office, 1889–1899," *Law and History Review* 21–3 (2003).
- (29) Id., "Jewish Police Informers in the Atlantic World, 1880–1914," *The Historical Journal* 50–1 (2007). 以下を参照。Id., "Who Killed Meyer Hasenfus? Organized Crime, Policing and Informing on the Witwatersrand, 1902–8," *History Workshop Journal* 67 (2009).
- (30) 一九二〇世紀の環大西洋世界における革新主義運動については、拙訳『生体認証国家』二〇三—八頁。
- (31) このことについては特に、シルバーがチリへ潜伏したとき警察の追手が及ばなかった箇所を示されている。その

(26) Charles van Onselen, *The Night Trains: Moving Mo-*

他、警察と出入国管理の情報が連携していなかったことも問題になるが、これに関しては、メグレ警視のモデルであ

るボンジャンの捜査の箇所で言及されている。